モンゴル研修を終えて

大仁中学校2年 萩原 さら

私は、モンゴルに行けると決まったとき、嬉しい反面多少の不安もありました。このモンゴルへの研修は私にとって初めての海外でもあったからです。ちゃんと交流をしてこれるのだろうか。事前研修の通りにできるのだろうか。そもそも安全に研修を終えることはできるのだろうか。勝手がわからず、人から聞いたり、テレビで見たことのあるだけの場所にいざ実際に行ってみるとなると、様々な思いがこみ上げてきました。

しかし、私が抱いていたイメージや不安は、この研修で大きく変わることになりました。

私の中で特に印象深く思い出に残ったのは、インターナショナルチルドレンセンターでの出来事です。見慣れない景色と耳慣れない言葉に囲まれているそこでは、国籍も、言葉も、文化も違う人々が集っていました。私は、その中でも内モンゴルから来たと言う同じくらいの年齢の子供たちと過ごすことになりました。しかし、何を言っているのか分からない人たちの中で、戸惑う事も多くありました。

そんな中、話しかけてくれたのは、1人の女の人でした。彼女は翻訳機や知っている英語を使い自己紹介をしてくれて、さらにチョコレートをくれました。彼女は中国人でちささんというそうです。

私は正直、それまで中国にあまり良いイメージを持っていませんでした。中国にたいしては歴史問題や領土問題でごたついていることや、マナーの悪い印象が大きかったからです。ところがちささんと交流していく中でその印象は変わりました。教科書やテレビで取り上げられていることはほんの一部でしかないことを知ることができました。

実際に自分から興味を持ち、体験してみなければわからない事もあります。知ろうともせずに決めつけてしまうのは、もったいないと思いました。

そのあとも、同じグループで過ごした人たちは、初対面にもかかわらず、とてもフレンドリーで積極的に話しかけてきてくれました。

『話しかける』と言っても言葉は違うし、かと言って互いに英語が流暢に話せるわけでもなく、ジェスチャーと知っている片言の英単語を並べるだけでした。でも、だからこそお互いに必死に伝えようとし、また必死に理解しようとします。

日本にいるときは、言葉の壁はとても高く、そして厚いもののように感じていました。確かに言葉が通じないというのはとても不便で、困る事も多くあります。ですが、私はそこで言葉以上に大切な事があることを知りました。

それは『自分から知ろうとし、理解しようとする事』です。私の知っている世界はとても狭く、小さなものです。その世界から一歩外へ出たら、今まで当たり前のようにしていた事や自分の中の常識が通用しなくなってしまいます。自分が相手に合わせるしかないのです。そして相手に合わせるためには、まず相手の文化や習慣を知る事から始めなければなりません。知るためには、自分から行動を起こさなければなりません。

私が、この研修で得た一番大きな収穫は、『言葉も、国籍も違くても分かりあうことができる』ということを知ることができたことです。これは、自分から行動を起こしてみて初めてわかったことでした。初対面の人とうちとけるのは同じ国でも簡単ではないのだから、まして違う国の人と打ち解けるなんて、とても無理だろう。という“独断”と“偏見”を当たり前のものと捉えていた私にとって、これは大きな変化です。現に私は、モンゴルという異国の地にあるインターナショナルチルドレンセンターという場所で、様々な人と交流し、そして最後にはスーツケースを運んでもらい、別れを惜しむまでに打ち解けたのですから。

相手が自分達とコミュニケーションをとろうとしていると、自分達も答えようと努力します。一番いけないのは、何もしない事です。

先日のリオオリンピックの閉会式では、4年後の東京オリンピックへの引き継ぎが行われました。今後、日本はますますグローバル化が進むことでしょう。それに伴い、少なからず言葉の障害について考える機会があると思います。けれども私はそれだけではいけないと思います。世界には様々な価値観を持つ人が沢山います。本当の意味での交流を図るのなら、同時に他の国のことについて、反対に国という概念にとらわれず、その人個人についても深く知ることが必要だと感じます。

この研修で、多くの物に触れ、色々なことに気づき、大きな変化と大きな収穫がありました。ですが、私はこれで終わった気にはなっていません。これは最初の1歩で、きっかけにすぎない思います。大切なのは、これからどう生かしていくかです。

この経験をもとに今後はこれまで以上に、良い意味で貪欲に過ごし、広く興味を持ち、多くを学び、体験し、発信していきたいです。